

女子高校文化—キラキラした彼女たちの中で

【あらまし】

受験勉強中心の生活をしていた中学生が、すべり止めのT女子高校にしか入学できなかった。それまでの自分の価値観とは異なる環境に戸惑ったが、女子高校の生活にどっぷりつかり、その学園生活を楽しんだ。学園生活の中で、「今」を楽しみ、「自分を持った」生き方をしていった。大学四年生になり、そんな学園生活をふり返り、不本意入学も「何かの縁」だったと今は感謝して、「未来の私」を思い巡らし書いた二十三年歳の誕生日のエッセイ。

●小見出し

中学は勉強だけだった

高校入試に向けて

不本意入学

入学式の日

学園生活

大学受験に向けて

大学生として

今の私—祖母との縁に感謝して

中学は勉強だけだった

私は中学一年生から本当に優等生。とーつても真面目な生徒だった。定期テストの点数はいつも学年十位以内。学年一番をとつたこともある。通知表は、一年生の時から全ての科目オール5。4をとつたのは三年生に体育で2回だけ。部活も部長とペアでテニス部。すごく真面目に練習していた。部活の後は週に2回の塾。塾は中学一年生の頃から三年間、卒業まで通い続けた。帰ってきたら宿題して、テレビ見て、寝る。特別な趣味もなければ特技もなかった。

でも、この生活が普通だった。その時はこれで充実していると思っていた。みんなから「頭が良くて羨ましい」と言われたけど、それだけの勉強をしていたから点数とれるのは当たり前だ。人より勉強したら人より点数はとれるものだ。定期テストってそういうもの、そう思っていた。だから、テスト前は毎日塾に通っていたし、土日も塾で朝から夜まで勉強していた。朝九時から夜九時までとか。そんなテスト勉強が普通だった。

こんなにしなくても点数がとれる人もいるのかもしれないが、私にはそれだけの時間が必要だった。それだけの量をこなしていた。テストの結果が出て自分より点数が高い人がいたら、「私の今回のテスト勉強は足りなかったんだ」って、「もつと勉強しとけば良かった」っていつも思っていた。「次はもつと準備しないと」って。別に無理をしていたわけじゃなかった。この私が私だった。

テストの点数がよかったから、成績がオール5だったからって親

からお小遣いがもらえたわけでもないし、ご褒美に何か買ってもらったことだつて一度もない。結果を見せると決まって他人事のように言われた。

「毎回、毎回よくやるねえ、お母さんにはできないわ。とりあえず、これが母のいつもの感想だった。「次はもつと頑張りなさいよ」なんて言われたことがない。父からは特に褒められたこともないし、「勉強しなさい」なんて言われたことも、もちろんない。両親にとつても、この私がいつもの私だった。私は私のために勉強していた。学期末、学年末、良い成績を残すために、定期テストで高い点数をとる。美術や音楽なんかも普通に頑張っていたら、いつも良い成績がもらえた。

「良い成績があれば、偏差値の高い高校に行ける。偏差値の高い高校に行けたら、良い大学に行ける。良い大学に行けば、就職は大丈夫」

今思うと、とてーも甘い考え方をしていた。周りから見るととつても優等生な中学生。これが私だった。

高校入試に向けて

中学三年生にもなると、学校でも塾でも受験についての話題が自然と増えた。

「あの高校の制服可愛い」

「あつちの高校の校則は緩いらしい」

「学園祭が楽しそう」

「早く決めたいから推薦が欲しいなー」

それまで偏差値の高い高校に入るためにあれだけ勉強してきたのだから、私にとっては待ちに待っていましたという話題のはずだった。でも、何故か私は全く高校に進学するということに関して興味を持てなかった。「高校生の私」なんて、その時は全くイメージがでしなかつた。皆盛り上がっているけど、私はなぜか冷めている時。

中学三年生の春、担任に聞かれた。

「どこの高校に行きたいんだ？」

「わからない。行けるところに行くよ」

「そうか、おまえならどこでも大丈夫だ」

私は思った。

「この人は私のどこを見てこんな簡単に、こんな無責任なことが言えるんだ？」

担任の先生は決してきらいではなかつたし、どちらかと言うと、とても生徒に真剣で、面白くて私はとても信頼していた。でも、この時に、「あー、この人に受験の話はできないなー」なんて感じた。当たり前の話だが、担任は私の定期テストの「結果」しか知らなかつた。

高校受験を考えた時、学校の成績に意味がないことは私自身、よくわかつていた。私はあくまで、定期テストのために勉強していた。教科書を暗記したり、授業中に先生がくばったプリントばかり復習したり。実力ではない。塾では、「一年生の時から実力を

つける」と言われ続けていた。塾で言われたことは全てこなしていたし、全校テストの成績もまあまあ良かった。

でも、自分の実力には全く自信がなかつた。良い成績を残していたのはあくまで偏差値の高い高校に入るため。成績はある。あとは実力をつけるだけ。特に深く考えずにこの辺の一番偏差値の高い高校を受験しようと思った。

「A高校に行こう」

私の答えは案外簡単に出た。でも、ひとつ問題点があった。A高校はほぼ私服登校だったことだ。私服に関して若干、面倒に思っていた私は、とりあえず、高校までは制服が着たかつた。これが私の志望校選びの悩みだった。ばかばかしくて笑えるかもしれないが、本当にどうしようかと悩んでいた。

学校のやりとりから数日後、塾の先生と全く同じやり取りをする。

「どこの高校に行きたいんだ？」

「分からない。行けるところに行く。でも、『良い』高校に行きたい。A高校とか興味あるよ。先生、どう思う？ でも、私服なんだよね」

私は、その時思っていたことをそのまま伝えた。

「おまえに、『良い』学校があるんだ」

先生はそう言った。

「B高校知ってるか？」

「知らない。どこそれ？」

そこは、A高校の次くらいに偏差値が高いと言われていた高校だった。先生に言われるまでB高校に関して全く知らなかった。というか、他の高校に関しても全く知らなかった。先生は付け加えた。

「制服があるぞ、しかも、スカートには黒いリボンが入っている。とっても品がある。あの制服着てれば、すぐにどこの高校かわかる。一種のステータスみたいなもんだな」

「なんで私にその高校がいいの？」

「勉強できる生徒ばかりだし、部活動も活発だ。おまえみたいに、こつこつ頑張るタイプの生徒が多い雰囲気だな。A高校はおまえには自由すぎて戸惑うんじゃないか？」

「ふーん、じゃあ、その高校に行く」

この会話で私の志望校は変更された。塾の先生は、一人でも多くの生徒に偏差値の高い学校に合格してほしいと思っていることは、その時の私でもわかっていた。でも、学校の先生より塾の先生の方が私自身を見て学校を考えてくれているように思えた。学校の先生は私の結果しか見ていないけれど、この先生は私の結果に至るまでの時間を知って、この高校を薦めてくれているのだと思った。今までの私を認めてくれている。そんな気持ちになった。

「先生、私、さすがに一校だけだと不安なんだけど、後、どこ受ければいいかな？」

「なら、公立はもうひとつ、〇〇高校。私立は、△△高校、T

女子高校、□□学園の順でいいんじゃないか？」

こうして、私の志望校の五校は塾の先生によって全て決められた。私は、何か具体的にやらなければいけないことができる頑張れるらしい。第一志望を決めてから、それまで以上に勉強に打ち込んだ。学校の成績はもちろん、落とさない。部活も中学最後の夏、大きな大会が控えていた。部活も本当に忙しかった。土曜日は練習試合で潰れたし、部活の時間がどんどん増えていった。

でも、今の私の実力ではトップの公立校なんて無理だとわかってきた。だから、しっかり実力をつけようと基礎から勉強した。定期テストのための勉強の他に、公立高校一般入試のための勉強、加えて、受験予定の三つの私立の入試のための勉強をどれもしっかりとこなしていた。私立の入試はそれぞれの学校のテストに特色があり、厄介だったが、やらなければいけない。「不合格なんてありえない」と受験する全ての高校に合格しようと、ただひたすら勉強していたように思う。

夏休みには近所の通っていた塾にプラスして、地下鉄で十五分ほどの同じ塾の違う校舎に特別講座のために通う日々だった。そこには他の校舎の生徒が、「同じ思い、良い高校へ」という強い気持ちで集まってきた。私の通っていた校舎からは、私しかその講座をとっておらず、友達はいなかった。でも、みんなそれぞれの目標は明確だった。友達とおしゃべりにわざわざ来ている訳ではない。自分の実力をつけるためだ。今までの塾の教室の雰囲気

とは全く違うものを感じた夏休みの経験だった。

その教室での私の順位は平均だった。もっと勉強している同級生を見て、私もまだまだなんだと考え直された。今思い出しても、よく頑張っていたなど、あの時の自分を褒めてあげたい。

不本意入学

これだけ勉強していても落ちる時は落ちる。私立の第一志望は不合格。その次のT女子高校と、その次の滑り止めはなんとか合格。私立の一般入試は二月。その後に公立。私立が一つダメだったことは全然気にもしていなかった。「私はB高校に行くから大丈夫だよ」。何の根拠もない話だった。それでも、笑いながらそんなこと言っていたのを覚えている。それだけ勉強していると思っていたし、自信があつたのだと思う。三月の公立入試の本番まで、私のB高校に対する思いはだんだんに強くなっていった。

公立は2校とも不合格。あれだけ憧れを持っていた、B高校の制服を着るという目標は果たせなかった。中学の集大成、このテストに全てを懸けていた。その時は、高校受験が私の人生を左右する全てのように思っていた。公立高校合格発表から帰宅。2校とも不合格。この事実を、T女子高校に入学することを示していた。泣いて、泣いて、泣いた。

「あなたが頑張ったなら、それでいいじゃない」
母はとても冷静だった。でも私は後悔の塊だった。

「あの時、もつと…」と考え始めたら切りがなかった。

「T女子高校に行くくらいなら、高校には行きたくない」

この一言に母は言った。

「あなたのおばあちゃんたち姉妹は、みんなT女子高校の卒業生なのよ」

私の母方の祖母は、母が六歳のころに亡くなっている。今のおばあちゃんは、後妻さんだ。亡くなった祖母は五人姉妹だった。みんな女。祖母は長女。よくできた人だったと話だけは聞いていた。

祖母はもう一人いるという事実を母から聞いたのは、私が小学三年生のころ。曖昧に親戚だと言われてきた人たちが沢山いたことは、小さいながらも不思議に思っていた。亡くなった祖母方の家族だったのだ。今のおばあちゃんは祖母の話を嫌がった。もちろんその気持ちも周囲は分かっているから、自然と亡くなった祖母の話はしてはいけない暗黙のルール。祖母の妹たちを含めた親戚の話ももちろんしてはいけないかった。

でも、私には関係なかった。亡くなった祖母に会ったことはなく、今、目の前にいるおばあちゃんが私のおばあちゃんだ。だから、私もその件に関しては何も聞かずにいた。

その祖母の姉妹たちみんなが、T女子高校卒業だというのだ。しかも中学から。全く知らなかった。公立2校に不合格になり、私がT女子高校に入学することが決まって、その時初めて言われたのだ。母は付け加えた。

「お母さんは、あなたが私立の第一志望に落ちて、T女子に合

格したことは何かの縁だと思っていたの。B高校よりも、もっとあなたにとつて良い学校かもしれないと思っていた」

そんなことを言ったのだ。私は腹が立って仕方がなかった。私があれば勉強してきたことを全否定されたような気持ちだった。この言葉をきいて更にT女子高校に行きたくなくなった。

どうして、これほどまでに行きたくないと拒否をしたのだろうか。あれだけ勉強してきたのに認められず、結果が出ず、目標を達成できなかった。なんだか大きな勝負に負けたような気持ちだったのだ。その負けを素直に認めることができなかった。それまでにこんなにも大きな負けを感じたこともなかった。ずっと勝ちたい勝負は勝ってきたように過ごしてきたのも、ひとつの理由かもしれない。

入学式の日

私も現実を見て、T女子高校への入学に同意したが、入学まで、その敗北感から立ち直ることができなかった。入学式の日になつてもまだ、顔は不機嫌でいやいや感がたつぷりだった。入学式当日、体育館にクラスごとに並べられたイスは各クラス2列ずつ。1列はT中学からの生徒、片方は外からの入学生。きれいに分けられた。一目見て、違いは歴然としていた。T中学からの子たちは慣れ親しんだ友達とおしゃべりに盛り上がり、全く入学式の緊張感はなく、リラックスした様子。私たち、外からの入学生はもちろん、知っている友達もおらず、緊張感たつぷり。女子

だらけの四〇人のクラスだった。その時の私はもちろん不機嫌で加えて、不安でいっぱいだった。

入学前のT女子高校のイメージはいいとこ育ちのお嬢様がたくさんいて、いじめとかもたくさんあるのかな、とか。女子の特有なグループ意識も特に強かったりするのかな、なんて思っていたりした。そんなところ絶対馴染めない。入学前からそんなことを決めつけたりもしていた。

入学式後、教室に移動。その時の私の正直な感想。

「うわー、女子しかいないー。すごい変な感じ」

クラスに女子だらけ。一年生のころは先生も女性の先生だった。はじめ教室内は、自然と中学からのあがりの子たちと、それ以外の子たちで分かれていた。でも不思議なことに、帰る頃になるとそんな境界線なんかなく、みんながわいわいしていた。私も中学あがりの子二人、YちゃんとTちゃんと仲良くなり、三人で駅まで帰ったりした。どうしてあの二人だったのかはよく覚えていない。でも、二人が話かけてくれたことは覚えている。とっても気さくで面白くて、とっても個性的。その後クラスが分かれたりもしたが、高校三年間とても仲良かった。

大学も学部は別々だったが今も連絡をとっている。その二人がいたから私が持っていたT女子高校のイメージは、初日にどこかにいつてしまった。二人からT女子高校のはじめの一から十まで教えてもらったような気がする。校舎内のことから先生のこと、T女子高校の暗黙のルールみたいなこと、T中学出身の子たちの

情報まで、ありとあらゆることを教えてくれた。

入学式から帰宅。私の一言は、「結構、楽しかった」。その言葉に母はびつくり。私自身はそんなこと言ったことを覚えていなかったが、後から母が言うには、それは、それはびつくりするくらいの態度の変わりようだったらしい。

学園生活

T女子高校の生活がスタートして私の考え方は大きく変わった。T中学出身のクラスの友達たち、T高校という環境の影響がとても大きかった。上手く言葉に表すことができないが、彼女たちはみんなとてもキラキラしていた。みんな、それぞれ違う「自分」を持っていた。自分の好きなこと、興味あること、自分が思うがままに、「今」をとっても楽しんでるように見えた。ただ、「今」だけではなく、「未来の自分」についてもじっくり考えを持っていたし、物事に関しても自分の意見もしっかり持って、発言する力もあった。

中学時代、私があれば頑張っていたテストに関しては、「テスト勉強はそこそこに！」が、みんなそろっての合い言葉だった。私にとつては全く違う世界に来たようだった。

私も一年生の時点では、大学進学は内部推薦でT大ではなく、他大受験を考えていたため、中学同様、今まで通りテスト勉強に励んだ。またT女子高校は、公立高校の授業のカリキュラムと大きく違いがあったため、その差を埋めるため、また新たに塾

にも通い出した。

T女子高生活の中で私の気持ちが全く変わった。高校三年間に出会った友達、先生、起こった出来事全てが私の考え方を变え、世界を新しくした。いつの間にかT女子高校の先生についても詳しくなって、テストの傾向もつかみ、授業で力を抜くようになった。先輩もでき、球技大会のドッジボールに全力を注ぎ、朝練することにも全く違和感がなくなり、体育の授業ではちまきをつけることも、ラジオ体操の第二しかしかないことも、冬には体育館でフオークダンスを踊ることも、文化祭の出し物に数か月の全てをかけることも、全く不思議に思わなくなった。T高校生活をおおいに楽しんでいた。

特にT女子高での文化祭の比重はとても大きかった。出し物の案について話し合いを始めるところから、みんな「超」真剣。T中出身の子たちがとりあえず、目の色を変えて、体を乗り出し、話し合いに挑む姿勢は一年生の私に大きな衝撃を与えた。準備が進む中で仲間割れもしばしば。真剣になりすぎて、泣き出してしまふ子も。いつもおちゃらけて、部活バカな友達も、文化祭と聞くと顔が変わった。文化祭の出し物の順位の結果発表でも、泣き出す子は当たり前。嬉し涙、悔し涙、みんな本当に素敵だった。三年生の頃には、こんな生活も当たり前すぎて自然なことになっていた。

こんな話を同じ中学出身の公立高校に通う友達にすると驚かれ、少し引かれる。テストの点数、成績、部活だけの生活に充

実感を感じていた頃とは変わり、T女子高校独特の生活、友達との旅行、おいしいランチ、映画を楽しんだり、コンサートに行ったり、読書する時間も増えた。一年生の頃から水泳部に入っていたが、体調が思わしくなく、二年始めには退部。それからは時間もできたので、「アルバイト!」と思ったが、T女子高校では高校生のアルバイトは禁止。でも私は、親戚の伝手で家のお手伝いという名目で歯医助手として働き始めた。

七年たった今でもそこのアルバイトは続いている。その歯医者で高校生を雇うのは私が初めてで、多分最後。何も知らない、分からない、高校生の私に教えることはとても大変だったと思うが、先生やパートのおばちゃんたち、その時の大学生のバイトの先輩には本当に感謝している。「働く」ということに関して考えるようにもなったし、電話対応から、患者さんへの対応、器具の準備、片付け、厳しく注意されることも多かったが、ここでの経験はとても貴重なものだ。私の高校生活は、中学の頃とは違う意味でとても充実していた。

大学受験に向けて

高校二年生と三年生の担任は同じ数学の先生だった。私の考え方が変化していくのを一番知っている人かもしれない。二年生の時点でもまだ、他大の受験を考えていた私は、担任の先生に素直に相談した。先生は、「T大への進学に少しでも興味があるのなら、一つの選択肢として残しておいた方が良い」と言っ

てくれた。私は何故か中学の頃から理系で、数学も理科も得意科目だった。高校でも何故か、頑張つて勉強しなくても数学や理科のテストはなかなか点数が良く、数学の先生だった担任も「将来、真剣に理系の職を考え、大学進学するなら決断は早めに」とアドバイスをくれた。

逆に、文系のテストはイマイチ。中学ほどテスト勉強に打ち込まなくなつた私は、苦手な科目の成績は良くもなく悪くもなく、くらいだった。英語、国語、社会、どの科目も好きだったが、成績は普通だった。長文読解は元々、読書が好きだったので得意だったが、古文の暗記に近い勉強はとても苦手。英語を聞くのは好きだったが、教科書の暗記は苦手。歴史が好きで日本史も世界史も好きではあったが、カタカナの人名、地名はまるっきりダメだった。

今思うと、これが私なんだと思う。すごく普通だ。数学も理科も好きだったが、理系に進みたいという思いには至らなかった。数学は一つの解答にたどりつけた時の達成感が好きだったし、理科は、世の中の不思議なこと、化学だったり、物理、生物であったり、それぞれの分野を理解していくことが面白かった。基本、学ぶことが好きなことは中学の頃と変わらなかった。

でも、三年生にもなると理系のクラスには本当に数学、理科が好きの子、理系の学部を他大で受験する子たちが集まった。私はそこまでの気持ちはなかったし、自然に英語や国語の授業を選択。でも、成績はイマイチ。特別に勉強したい分野もない。

軽く、壁にぶつかった。「他大で特に行きたいところもない。なら、残りのT女子高校での生活を多めに楽しみ、T大に進学しよう」。それが、三年生の春、決意したことだった。この決意も両親とても驚かせた。

高校の成績はトップではなかったが、とりあえず、T大の学部を選べるようなくらいにはいたので、これ以上落とさないように、少し上げるくらいの気持ちでいた。夏休みはもちろん、クラスの出し物の準備に全身全霊を込めていた。公立高校の友達受験勉強のために予備校に毎日通っていたが、私は毎日学校にいた。劇の準備のために。私の夏休みはこんな感じだとは到底、その友達たちには話せなかったのを覚えている。

学部選択も、高校受験した時の志望校選択となんら変わらなかった。T大の内部推薦は高校の成績順で選択権が与えられるようなものだった。管理栄養学科は成績トップクラスの子たちで定員いっぱい、こんな状況だった。私たちの大学入学から新しく教育学部ができた。担任には、「数学が好きなら数学の先生の道もある」と、勧められたが、先生になることにイメージが持たず、教育学部は断念。特にデザインなどにも興味がなく、なぜか自然に、国際コミュニケーション学部を選択していた。管理栄養学科の次くらいに言語コミュニケーション学科の目安成績が高く、私の成績ではギリギリだったが、とりあえず、第一志望は、「国際言語コミュニケーション学科」だった。

三年の秋、文化祭も終わってそんなに時間もなく、すぐ内部

推薦の選考だった。なんか普通に考えてありえない感じではあったが、それは軽くやってきた。

「いついつまでに最終志望を決めて」

「おおーこんな簡単にやってくるのか」

と、その時は思ったが、何故かすんなり受け入れられた。

「これがT女子高校の流れなんだなー」

と思いつ、流れに沿っていた。しかし、結果は残念。

一部の成績上位の子が最後にして志望を変更、私は「言語」の定員に入ることができず、第二志望の表現文化学科に。その時はもちろん号泣。高校受験の結果を思い出した。

でも、表現への入学は案外早く受け入れることができた。どちらの学科も同じような授業が選択できると知っていたし、テスト勉強も手を抜いていた。成績が十分でなかったのは自分の責任であるし、「表現」へ行けば行ったなり、自分の道を見つけ、楽しめると思った。おそらく中学生の頃の私だったら、こんな考え方はできなかっただろう。こんな風に考えるようになったのもT高校での生活の影響だと思っている。

大学生として

今は、表現文化学科に来て本当に良かったと思っている。今まで興味を持っていなかった内容の授業も取るようになったりして、新しい発見が多い学科だったように思う。休学までして留学もした。英語は苦手科目だったのに不思議な話だ。自分で休学し

たい。なんて行動に移すことも以前の私では考えられなかった。でも、留学でまた、新しい人たちとの出会いもあったし、考え方も変わった。

今、中学の頃の友達に会うと、私は高校に入ってから本当に変わったと言う。「自分があるね」って言われることがとっても嬉しい。T女子高校に通って、人と比べないようになった。もちろん、今でも勝負事は負けるととても悔しいが、「自分のままで勝負している」感じがする。人と比べない。私には私の考えがあつて、人に押し付けることはしたくないが、伝えたいとは思ふ。相手の思いを聞く時間もとても好きなんだと。これまで自分と向き合ってきたことの発見だ。

T女子高校では、こうして自分と向き合うこともできるようになった。普通に公立高校に進学していても、自分について考える時は誰にでもくると思う。でも、私にとっては、そういった時間をT女子高校という環境の中で過ごすことができたことは本当に嬉しく、感謝している。

私にとってT女子高校で出会った友達、先輩は本当に個性的で頼もしい。彼女たちの存在なしでは「今の私」はいない。それぞれが、それぞれの方法で輝いているし、カッコいい女性ばかりだ。私は彼女たちをとて尊敬している。これからも今まで通り切磋琢磨して支え合っていきたい。

今の私—祖母との縁に感謝して

母と私の今までについて話したことがある。「あなたは高校生生活をT女子高校で過ごして本当に良かったね」と言われたことがある。母も私の変化に気づいていたのだ。母も私も、T女子高校でおきた私の変化は良い変化だったと思っている。あの時、高校受験で第一志望の公立高校に合格していたら、T女子高での充実した生活はなかった。こんな風に自分について考えることはなかったかもしれない。T大に来ることもなかったかもしれない、休学して、留学してなんてことを考えることもなかったかもしれない。

でも、今はこうしていまT学園の一員として学べていることがとても嬉しい。これから社会人になって大変なこともたくさんあると思うが、私は私らしく乗り越えられると信じている。

「第一志望に落ちて、T女子高校に入学するのも何かの縁かもしれない」

これは、私が高校受験で第一志望に落ちた時に母が言った言葉だ。あの時、私はこの言葉に本当に腹が立ったが、本当に良い縁だった。亡くなった祖母は、T女子高校が私に良い場所だとかつていて、あの時の私に「T女子高校で学べ」と天国から言っていたのかもしれない。

二〇一一年年七月三日二十三時、二十二歳最後の日がもうすぐ終わる。二十三歳の一年はどんな年になるのかな。小学生の頃に描いていた二十三歳の女性つてもっと大人な感じだったよな。二十二年間の私の時間を振り返ってみても、何ひとつ後

悔はない。

「本当に…?」

やっぱり少し違うのかもしれない。後悔はたくさんある。でも、後悔しないように気持ちを变えることができるようになったのだと思う、この二十二年間で。私の人生に起こった出来事には全てに意味があつて、「今の私」をつくるために、「未来の私」のために必要な時間だつた。

そう思えるようになったのは、明らかな私の中の変化だ。T女子学園の一員として学び始めてから、私の世界は新しくなつた。あれからもう七年がたつた。八年目の真つ只中、この学園の学生であることを誇りに思い、最後の一年を大いに楽しみたい。T女子学園が私に与えてくれた経験全てに、感謝して…。

最後に、神様は、これまでT女子学園で成長してきたであろう私にちゃんと大きなご褒美をくれた。第一志望の企業に内定。二十三歳を思い、考えることは沢山あるが、後悔はひとつもない。大きすぎるご褒美にとても感謝している。これからもっと世界が広がつて、沢山の人たちに出会つて、新しい発見をして、苦しいこと、大変な時を乗り越えながら楽しく生きていくことが楽しみで仕方ない。

これからもT女子高校、T大学で出会つた友達と自分らしく生きていきたい。来年の誕生日はきつとお仕事が大変だろう、その時、私はどんなことを考えているのだろう。楽しみだ。